法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

序　能のわざの新たな研究に向けて

横山，太郎

(出版者 / Publisher)
The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University / 野上記念法政大学能楽研究所「能楽の国際・学際的研究拠点」
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
わざを伝える : 能の技芸伝承の領域横断的研究（能楽研究叢書 ; 9）
(巻 / Volume)
9
(開始ページ / Start Page)
3
(終了ページ / End Page)
13
(発行年 / Year)
2024-03-25

序　能のわざの新たな研究に向けて

横山　太郎

能のわざは、師匠から弟子へとどのように伝承されてきたのだろうか。そしていま現在、それはどのように伝承されているのだろうか。こうした問いについて、私たちの研究グループは複数の学問手法を横断して探求する研究プロジェクトを進めてきた。本書はその成果報告である。

わざを探る——本研究の対象と目的

わざとは上手くやることだ。本書ではこの言葉を、上手くやるための技能知と、それを発揮して上手くやった身体的技芸の両方を含んだ概念として扱う。[1] ひらがな表記を用いるのは、主要な先行研究のひとつである生田久美子の『「わざ」から知る』と、その影響を受けた諸研究に敬意を払ってのことである（生田 二〇〇七）。

能楽はわざの集積である。そもそも私たちの生そのものがそうだ。ただ歩くということすら環境と身体の相互作用を巧みに調整して成し遂げられる見事なわざであることを、子育て、リハビリ、ロボット開発などの現場に立ち会う人は知っている。まして舞台上で適切に歩くということがどれほど高度なわざであるかを、能楽師は知っている。たとえば喜多実は『演能手記』のなかで、幕を出て橋掛かりを歩いて舞台に出るというただそれだけのことの困難につ

いて繰り返し語っている（喜多 一九三九）。

自身が上手くやること以上に困難なのが、弟子に上手くやらせることである。なぜ自分にできるわざがこの弟子にはできないのか。どうしたらそれは伝わるのか？　そもそも上手いとはどういうことか？　後述するように、これらの問いは芸能のわざの伝承をこえて人間性の根源に触れており、現代の様々な学問が取り組んでいる。そして能の世界では早くも六百年前に、世阿弥が実践者としての立場からこうした問題を深く思考し探求していた。

この研究プロジェクトは、いわば、世阿弥が探求したことを今日的な手法によって探求しようとするものである。私たちはわざが伝承される場である「稽古」に焦点をあて、そこで師匠と弟子の間にどのような指導が発生するのか、また稽古の記録や型付（所作の記譜）等のメディアに定着したわざの表象はそこにどう関わるのかといったトピックについて、世阿弥以来の演出資料に基づく歴史研究の手法、運動解析に基づく文理融合的手法、会話分析やインタビューなどの社会科学的手法など、複数の研究手法を横断して探求してきた。その経過報告というべき本書は、諸手法を有機的に統合するには道半ばと言わざるを得ないが、ひとまずの具体的な成果によって、こうした研究領域を探る道筋を示すことができたのではないかと思う。

ここで本書の扱う範囲について付言しておく。本書が解明しようとするわざの伝承の実態と仕組みは、多くが能と狂言で共通していると予想される。しかし、本書に収められた論考は能のシテ方とワキ方のわざを調査対象としている。本書のタイトルが「能楽における」とせず「能における技芸伝承」としたのは、狂言を除外したいわけではないが事実として狂言師のわざを研究するに至っていないという事情によるものである。また、謡にも囃子にも、面・装束・作り物の製作にも、当然ながら「わざの伝承」があるが、本書が扱うのは、所作や舞といった身体操作（いわゆる「型」）の側面に限られている。

研究の背景

従来の能楽のわざの研究として第一にあげるべきは、横道萬里雄による構造・技法研究である。横道は能のテキスト、音楽、演技を構成する要素を分類し、〈要素が集まってブロックを作りブロックが集まって大ブロックを作る〉という積層構造があることを解明した。身体的なわざについて言えば、能のいわゆる「型」を、カマエとハコビに基礎付けられた様式的な所作単元の組み合わせとして体系的に記述した（横道一九八七）。

横道は、自身の分類学的研究手法を医学にとっての解剖学に喩え、「能の生命力を知るには、まず解剖学から始めるべきだと考えた」と述べている（横道一九八六：四）。解剖学は、「死体解剖」という言い方からわかるように生き物の組み立てを静態において捉える。横道が自ら認めたように、それは生きて動く生命活動を研究する手前の、基礎的な学問である。かれは静態把握（分類）に徹して能楽研究の巨大な基礎を築く一方、能という生き物が自ら動き変化しながら生きる仕組みの解明を課題として残した。本研究が取り組むのが、まさにこの課題、すなわち能のわざの動態把握である。それを研究するのに格好の対象として私たちが注目したのが、わざが師匠から弟子へ教えられる稽古の場である。

稽古の場において、わざは生きている。こんな状況を想像してみよう。師匠は自身のわざを伝えようとして、弟子に「そうではない、こうだ」と指導する。ただし、必ずしも師匠の頭のなかに固定的な正しいわざがあらかじめ存在するわけではない。しかも師弟の肉体的条件が異なっている以上、師匠の動きを忠実にコピーしても師匠と同一のわざにはならない。それぞれの身体の固有性と向き合いながら、師弟は共にこのわざの正解を探る。師匠の脳裡にかつて自身の師から受けた教えの記憶が蘇り、わざは活性化し、様々な教え方が発生する。弟子の身体はこの稽古の時間

のあいだに変容し、やがて師匠は「そうそう！」と言って、わざが伝わったことが師弟間で納得される瞬間が訪れる。その頃には、わざは師匠のなかでバージョンアップしているかもしれない。弟子はその後に教えの内容を書き留めて、生きたわざをいわばフリーズドライで保存しようとする。これが代々伝わり「書付」「伝書」「型付」などと呼ばれる。子孫がこれを読むことで、かつてこのわざが伝わった瞬間の身体の感触が「解凍」され息を吹き返すかもしれない。あるいは子孫がそれを「型」とみなすことで、能のわざを様式的演技体系の方へとさらに一歩押し進めるかもしれない。

わざの動態とは、たとえば以上のようなことである。稽古に注目することで、ミクロのスケールでの身体間の伝達から、マクロのスケールでのわざの歴史的変化に至るまで、能のわざが動的過程のなかにあることが見えてくる。その仕組みの解明は、横道萬里雄が最終的に目指した「能の生命力を知る」ことにほかならない。その意味で私たちのプロジェクトは、横道の構造・技法研究を引き継ぐものである。

さて歴史的変化はともかく、ミクロのレベルでの伝承プロセスの研究は、これまでの能楽研究にはほとんど見ることができなかった。そこで本研究は、必ずしも能楽を対象としない理論研究と広義のフィールドワーク研究の成果に学んだ。本書の予告編的な論文「わざ継承の学を構想する」において、特に日本の伝統芸能に関連する三つの研究の系譜をあげたので、ここで再確認したい（横山 二〇一六）。

第一にすでに言及した生田によるわざ言語の研究である。伝統芸能の徒弟制的技芸伝承という文化事象を、哲学・教育心理学・認知科学・文化人類学・スポーツ研究・看護学など多領域からの学問的関心事に浮上させた意義は大きい。第二に、やはり徒弟制に注目したレイヴとウェンガーの状況的学習論（レイヴとウェンガー 一九九三）。これらへの批判的応答である福島真人編『身体の構築学』、なかんずく能の稽古のフィールドワークに基づきわざの保存と

変化のダイナミズムを明らかにした藤田隆則の所収論文「古典音楽伝承の共同体」は、本研究にとって最も重要な先行研究である（福島　一九九五、藤田　一九九五）。第三にエスノメソドロジーや文化人類学などの微視的な会話分析に基づく研究（菅原　二〇一三ほか）。

これらの理論的背景には、一九八〇年代以降の哲学・認知科学・言語学・文化人類学等の交渉のなかで知における身体性や世界内存在性があらためて重視され、間身体性（M・メルロ＝ポンティ）、knowing-how（G・ライル）、暗黙知（M・ポランニー）、協応（N・ベルンシュタイン）、アフォーダンス（J・J・ギブソン）といった概念が再評価される潮流があった。「状況に埋め込まれた」「力学系」「身体化された」「エコロジカル」等々の語を冠するこれらの動向のなかでは、ヒトのような知的システムを理解するのに、外界の表象を心内（脳内）で処理して外界に行動として返すという古典的なモデルに代わり、身体と環境を含み込んで相互作用するモデルが提案された。今や身体が何かを上手くやること（＝わざ）は、思考の結果ではなくそれ自体が思考であり、「知とは何か」を理解するうえで決定的に重要な探求領域となった[2]。

いささか乱暴にわざ（技能知）への関心が高まる背景を概括したが、私たちが目指したことは、わざをめぐるこうした大きな学術的文脈へと能楽研究を接続することである。それは、単に能楽研究に新しい研究手法を導入するだけでなく、逆に能楽研究からわざをめぐる諸研究へ多くの知見を提供するという意義をもつはずだ。前稿（横山　二〇一六）で述べたことを繰り返すことになるが、能は、現在進行形でそのわざを担って活動する多くの実践者と同時に、そのわざについての膨大な歴史資料を抱える。つまりフィールドワークと歴史研究の両面からわざの動態に迫ることのできる稀有な研究対象である。世阿弥という貴重な思想史的資源もある。関連する諸領域からのアプローチに対して差し出すべきものは多い。本書がそのジョイント役として機能することを期待している。

研究プロジェクトと本書の成り立ち

もともと法政大学能楽研究所は、文理融合的アプローチによる型（所作単元）の研究を進めていた。二〇一四年、そのメンバー（山中玲子、中司由起子、深澤希望）に能の身体論を研究してきた横山が加わり、能の型の新たな研究を構想するところから本研究はスタートした。能楽研究所は、文部科学省の定める共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」に認定されているが、私たちはその公募型共同研究プロジェクトの一つとして「型継承研究会」を立ち上げ、様々なジャンルのフィールドワーク研究の手法に学びつつ、そこに記譜研究や歴史研究を統合する可能性を探った。具体的には、シテ方五流の能楽師に稽古の場において型付がどのように用いられているかをインタビューし、様々なジャンルの専門家に研究手法のレクチャーをお願いした。

二〇一五年九月にはかれらと共にシンポジウム「わざ継承の歴史と現在――身体・記譜・共同体」を開催した。それぞれの発表トピックのみ紹介する。岡田万里子（京舞井上流）、児玉竜一（歌舞伎）、清水拓野（中国古典劇秦腔）、中村美奈子（ダンス・ノーテーション）、西尾久美子（京の花街と宝塚）、林容市（学校体育）、藤田隆則（能楽）、増田展大（ボディビル）、柳下惠美（モダンダンス）、湯浅宣子（バロックダンス）。なお、前稿（横山 二〇一六）はシンポジウムの基調報告を元にしている。

このときに参加した林容市がメンバーに加わることで、プロジェクトは次の段階に進んだ。生理心理学・体力学のアプローチによるスポーツ研究を専門とする林は、科学的測定手段による動作解析という手法をもたらした。二〇一六年九月、プロの能楽師が初心者に型の稽古する様子を観察する実験調査をおこない、モーションキャプチャーカメラによる3Dデータ、通常カメラによる師弟間の言語的・身体的コミュニケーションの記録、事後的なインタビュー

調査の記録といった資料を得た。これらに対する研究と、以前から継続してきた型付の歴史研究の成果を発表するために、二〇一八年三月にシンポジウム「以心伝心・以身伝身―「ワザを伝えるワザ」とは何か?―」を開催した。またシンポジウムの前後の時期に、型付など能のわざの記譜資料を展示する「能付資料の世界―技芸伝承の軌跡をたどる―」を法政大学博物館展示室で併催した。

本書の林、横山、深澤の論文はこのシンポジウムの発表内容を、また本書口絵は展示のために山中と中司と深澤が執筆した資料を、それぞれベースとしている。林・横山共著論文と横山論文は同じ実験データを扱うが、関心の所在が異なる。前者は、達成度をスポーツのように数量的に把握するのが難しい芸能のわざの学習において、客観的な動作分析による運動記述がどのように役立ちうるのかを検討する。後者は、師弟の間で同一のわざが伝わるとはどのようなことなのかを考察する。共通しているのは、わざの伝承のミクロのプロセスにおいて本人も気づかないうちに生じていることを発見しようとする視点である。これまでも古典芸能を対象とする客観的計測に基づく動作研究は存在したが、プロフェッショナルの高度なスキルの秘密を解き明かすというタイプのものが多く、弟子との身体的な相互作用は視野に入っていなかった。またその成果に対しても「既知のことを再確認しただけ」という冷淡な反応が多かったように思う。両論考はこうした壁を乗りこえることを目指している。

先述したように、本プロジェクトにとって型付は重要なトピックである。私たちは型付を単に過去の演技・演出を知る手かがりとみなすだけではなく、型付を書くこと読むこと自体が能の動態の一部であるという視点に立って、記譜方法、その変遷、稽古の現場との関係などを探ってきた。この視点は、ダンス・ノーテーションがダンスをどう変え、五線譜が西洋音楽をどう変えたのかといった記譜研究の問題系に繋がっている。口絵の記譜資料集と深澤論文は、こうした型付研究の成果の一部である。深澤論文は世阿弥の時代から近・現代に至るまでの型付や伝書に見える型の

説明的記述を通覧し、それが次第に記号化していく型付の記譜方法と相補的な関係にあったことを明らかにし、さらにこうした変化がわざ伝承の共同体が素人へ拡張していくことと結びついていることを示唆する。こうした知見は、生田やレイヴとウェンガーの共同体論に対して歴史的な視野を持ち込む意義をもつだろう。

中司論文も型付に関するものだが、こちらはシテに比べて研究がほとんど進んでいないワキの型付についての基礎研究である。中司がリーダーを務めるもう一つのプロジェクト脇型付研究会（岩崎雅彦、小田幸子、大日方寛、深澤希望、山中玲子）は、江戸時代初期の脇型付『能之秘書』の読解を進めてきた。本書は、その成果に基づき中司と山中と深澤が翻刻した同書全文を資料としてシェアした。その解題を兼ねる中司論文は、同種の三資料と比較して『能之秘書』の資料としての性格と、当時のワキの演技の性質を明らかにする。中司はまた、面をつけず舞踊的所作の少ないワキのわざがシテとは異なった記譜方法を要請したことを示唆し、わざの性質とわざの表象の性質の関係という興味深い視点を提示している。

山中論文は、本書のために書き下ろされた。研究の文脈について若干の解説をしたい。インタビューにおいてある能楽師から聞いた話だが、かつての流儀主催公演は、観客に向けた興行というよりは「稽古を見たい人に見せてあげる」という感覚でおこなわれていたという。現在の能界でも、本番のために稽古があるというよりは、わざの伝承のために本番があるというような感覚は残っているのではないか。能がこのように稽古を重視する芸能となったのは、世阿弥の晩年のことのようだ。その時期の稽古論（習道論）の代表である『至花道』跋文からは、かつては少年期を脱した後の「稽古」といえば上手な先輩の芸を盗んで自分で修行することだったのが、貴人階級の芸に対する期待値が上がったことに応じて、師匠と弟子のあいだでおこなわれる「稽古」の重要性が高まったという事情が窺われる。

では、そのような時代に世阿弥は実際に弟子（息子）に対してどのような稽古のやり方をしていたのだろうか？

推定困難と思われるこの問いに切り込んだのが、山中論文である。山中は『申楽談儀』における謡や所作に関する細かな記述に注目し、それが能の上演を回顧した「芸談」というよりは、師弟の稽古の現場における指導の書き留めではないかという作業仮説を立てる。すると、それらの言説に独特の構文的特徴が浮かび上がり、その分析を通じて世阿弥による弟子の稽古のあり方が見えてくる。さらに山中は指導対象の作中場面の検討から、世阿弥が伝えようとしたわざの眼目が何であったのかを示唆する。こうした視点は、本プロジェクトの過程で現代の師弟間の稽古のプロセスを観察し、理論的な討議を重ねることから発想されたものだ。領域横断的研究が世阿弥伝書に新たな読解をもたらしたという点で、本書の重要な成果となっている。

本書に論文・資料として収めた調査研究以降にも、私たちは研究を進めている。二〇二一年には拠点の新たな公募型共同研究プロジェクトを立ち上げ、玄人の師弟間の稽古プロセスのモーションキャプチャー実験をおこなった。前述した型付の利用実態についてのインタビュー調査の記録など、本書に収めていない資料もある。さらなる研究の進展を期すと同時に、本書が新たな能楽研究の活性化に寄与することを期待したい。

参考文献

生田久美子（二〇〇七）『「わざ」から知る』東京大学出版会。初版（一九八二）。
生田久美子と北村勝朗［編］（二〇一一）『わざ言語――感覚の共有を通しての「学び」へ』慶應義塾大学出版会。
金子明友（二〇〇五）『身体知の形成（上・下）』明和出版。
喜多実（一九三九）『演能手記』謡曲界発行所。
倉島哲（二〇〇七）『身体技法と社会学的認識』世界思想社。
佐々木正人（二〇一三）『身体――環境とのエンカウンター』東京大学出版会。

菅原和孝（二〇一三）『身体化の人類学――認知・記憶・言語・他者』世界思想社。
諏訪正樹（二〇一六）『「こつ」と「スランプ」の研究――身体知の認知科学』講談社。
塚本明子（二〇〇八）『動く知 フロネーシス――経験にひらかれた実践知』ゆみる出版。
床呂郁哉［編］（二〇二一）『わざの人類学』京都大学出版会。
樋口聡（二〇一七）『教育における身体知研究序説』創文企画。
福島真人［編］（一九九五）『身体の構築学』ひつじ書房。
藤田隆則（一九九五）古典音楽伝承の共同体――能における保存命令と変化の創出、福島真人［編］『身体の構築学』ひつじ書房、三五七–四一三。
村田純一（二〇一三）『技術――身体を取り囲む人工環境』東京大学出版会。
横道萬里雄（一九八六）『能劇の研究』岩波書店。
――（一九八七）『能の構造と技法』岩波書店。
横山太郎（二〇一六）わざ継承の学を構想する――能楽の技法を中心とする学際的な研究のために、『能楽研究』四〇、一六一–一七四。
レイヴ、ジーンとエティエンヌ・ウェンガー（一九九三）『状況に埋め込まれた学習――正統的周辺参加』産業図書。
Button, Chris, Ludovic Seifert, Jia Yi Chow, Duarte Araujo and Keith Davids.（2020）*Dynamics of Skill Acquisition: An Ecological Dynamics Approach*. Human Kinetics.
Fridland, Ellen and Carlotta Pavese. Eds.（2020）*The Routledge Handbook of Philosophy of Skill and Expertise*. Routledge.

注

1　このような概念設定は、カテゴリーの違うものを混同しているとの誹りを受けるかもしれない。たしかに技能（状態）と行為（運動）は違う。生田と北村（二〇一一）第1章で生田久美子がそうした観点からわざ概念をtaskとachievementに分節することを試みている。しかし、たとえば私たちが体操の妙技を見て「凄いわざだ」と感嘆するときに、「運動を実現する技能」と「技能を発揮した結果の運動」を区別することは難しいし、そうすることが生産的だとも思われない。あえてわざを厳密に定義するなら、「背後に技能がある行為」とでもなろうが、後述するように技能が生体と環境の協応であるならばあらゆる行為には技能が伴うことになり、この定

義はほとんど同語反復だ。生の現実において技能と行為が混然としていることを反映した「わざ」という日本語を、本研究ではむしろ活用したい。

2　本書は芸能研究の側からこうした研究領域へアクセスする導きとしての役割も期待されると思うので、さらなる文献ガイドとしても役立つ書籍を中心に、未言及の文献を紹介する。近代学術において初めてわざに研究対象としての正当な価値を与えたのは、マルセル・モースの身体技法論だが、それ以降の社会科学における研究史については倉島（二〇〇七）に詳しい。わざをより大きな哲学史のなかで捉えるには塚本（二〇〇八）、Fridland and Pavese (2020)。文化人類学の最近の動向については床呂（二〇二二）。生態心理学からの展開については佐々木（二〇一三）、村田（二〇一三）など。力学系アプローチをふまえたスポーツ心理学における技能獲得研究についてはButton et al. (2020)。スポーツにおけるコツ、カンといった「身体知」については金子（二〇〇五）、樋口（二〇一七）等のほか、認知科学からのアプローチとして諏訪（二〇一六）。それぞれの領域に重なるところがあることは言うまでもない。